



平成27年5月27日
佛教大学附属幼稚園

みみ・身身・耳

園長 藤堂俊英

暑い夏に向けて野山が水分補給する梅雨の季節を迎えます。アジサイが雨の中で青や紫や白や桃色に輝くこの時期になると、小学校のころ、ときおり母が家に咲いていたアジサイを学校に持って行くように包んでくれたり、お母さんたちが教室の前まで傘を届けに来てくれたことや、雨漏りのする所に音消し用の雑巾をいれたバケツを運んだり・・・そんなことを思い出します。

雨の日に幼稚園では子どもたちに、歌やピアノの曲にもなる雨だれの音の話をしてします。傘の上におちた雨粒の音、園バスの屋根の上におちた雨粒の音、葉っぱの上におちた雨粒の音、よく耳を澄ませて聞くと、雨粒さんが何かお話してくれているみたいだよとか、雨粒さんは高い高い雲の上から降ってきて怖くないのかなあ？というような話をするのですが、返してくれる言葉は毎年いろいろです。空から降ってくる雨粒さんに勇気のことを托そうとして聞く「雨粒さんはこわくないのかなあ？」という問いかけに、この前は「お顔がないからこわくない」という、今までにはなかった答えが返ってきました。一人一人違う子どもたちの柔らかなところと出会った私たちの言葉の雨粒は、さまざま音色をたて、時には思いもしなかった光を放ちます。そこを私たちがしっかりと受け止めてあげることが、子どもたちのこころの成長につながっていきます。

茨木のりさんに日本昔話「聴き耳頭巾」をとりあげた「聴く力」という次のような詩があります。

ひとのこころの湖水 その浅深に 立ちどまり耳を澄ます ということがない
風の音に驚いたり 鳥の声に惚^{ほう}けたり ひとり耳をそばだてる
そんなしぐさからも遠ざかるばかり
小鳥の会話がわかったせいで 古い樹木の難儀を救い
きれいな娘の病気まで直した民話
「聴き耳頭巾」を持っていた うからやから
その末裔^{すえい}は我がことのみは無我夢中 舌ばかりほの赤く くるくと空転し
どう言いくるめようか どう圧倒してやろうか
だが どうして言葉たりえよう
他のものを じっと 受けとめる力がなければ

私たちの国に伝わる昔話では、「聴く力」が大切な「いのちを守る力」として登場します。日本口承文芸研究家の中村とも子さんによれば、「聴き耳」が登場する民話は日本各地に約百話もあるとのこと。ご先祖さんたちは何んと耳を傾け聴くことを大切にしてきたことなのでしょう。一説によれば、耳はいのちの成長を守る「身の中の身」であるから「みみ」というのだそうです。私たちの文化遺産「聴き耳頭巾」の精神を、子どもたちの耳の成長、言葉の成長、そして心の成長に生かしていきたいものです。

